

上原三川(四)

——日本派俳句運動の地方への伝播の状況 IV——

宮坂敏夫

- 一 日本派俳句との出会い
- 二 月次十句集における三川
- 三 「新俳句」編輯の内情
- 四 旧派との論争 (以上一号)
- 五 教育者としての一面 (二号)
- 六 新題昆虫俳句 (三号)
- 七 松声会小史——「はつき木」を中心に (以上四号)
- 八 信濃十句集
- 九 糸瓜忌論争——選者としての三川
- 十 三川俳句論——編年体三川句集
- 十一 三川年譜考

七 松声会小史

——「はつき木」を中心に

(一) 第一次松声会

松声会結成に關しては、すでに本論考の(一)「旧派との論争」⁽¹⁾の項で簡単に触れているが、松声会の歴史をかえりみる上から、必要な点には改めてあたっていききたい。

『奇峰文集』⁽²⁾の巻末に出る年譜によると、明治二十九年の項には次のような記事がみえる。

「四月、上京滞在一ヶ月、此間子規庵に出入す。同人のしばしば集るもの、鳴雪、虚子、碧梧桐、紅緑、飄亭、肋骨、洒竹、把栗、牛伴、爛腸等。帰途洒竹氏の徳憑により柏原に一茶の趾を訪ふ。松本に松声会を起す。」

これによると、松声会をつくったのは、二十九年春ということになる。ところが、「ほととぎす」第二巻2号(明治31年11月10日発行)には、地方俳句界欄に、矢ヶ崎奇峰の松声会報として、

「五六の俳友を得て、松声会の起りしは去年の花散る頃なりけむ。暑往寒来今歳復秋に入る、会友の離散時にありといへども、今や毎月会の出句者十二三名、月毎に兼題を分ち時々相会して雅懐を暢ぶ。其間多少盛衰なきにあらざるも亦以て新派の俳句の漸次に周囲の注意を惹くに至れるを知らん。此時に当てほととぎす一大改善を為す。此指南車あり会

* 信州大学医療技術短期大学部一般教育

友大に斯道に奮はんと欲す。」

このような記事が出て、「ほととぎす」の発行日から推して、「去年の花散る頃」は、三十年晩春ということになるが、これは奇峰の記しあやまりであろう。もし、そのような期日であれば、三十年四月下旬には帰松していた、上原三川も当然参加したであろうし、三川の名が記載中にみえないはずはないからである。

『奇峰文集』には、同じ二十九年の項に、俳諧雑誌「はくき木」を計画したが、ある事情のため、発行までに至らなかつたことが出ている。この点は、後に、松声会が再興されて発行される「はくき木」第一号（明治三十七年十月十日発行）の巻頭言に「はくき木行について」と題し、奇峰が書いた記事と一致している。そこには、

「明治二十八年の夏、諏訪湖畔に芒齋を訪ひ雪庵と三人で俳諧雑誌「箒木」を発行する計画をした事があった。芒齋は今故人となつて仕舞たし、もとより旧派の俳人であつたのであるが、当時尚子規先生が日本派の旗を翻した初めの頃であつて、余が先生に刺を通じたのは、其前年の初冬でありまだ俳風も確立したのではなく、頗る無鉄砲に新派といふものはこんなものであるなどと吹聴し、芒齋もそれは面白いつ信州の俳風を一洗しやうではないかといふやうな調子で議は忽ち一決したのである。そこで、広告の三千枚も印刷して県下に配布した。一体「箒木」といふのは彼の有名な「ありとは見えて逢はぬ君かも」の古歌から取つて社名を無有社と名付けたのである。所が少しく行き違ひがあつて遂にありとは見えて逢はずに終つてしまつた。」

とある。小林雪庵、林芒齋と上諏訪町の牡丹屋に会合をもつたのが

二十八年夏であり、前年二十七年初冬から子規と文通をはじめたことなど、奇峰の記述は正確である。松声会結成記事も「奇峰文集」⁽³⁾所載の年譜記事の方を事実と推測してよいであろう。

二十九年晩春に結成された松声会は、日本派の新俳句を鼓吹する地方結社として、松山の松風会について全国の魁^{まがけ}となつた。その結成の中心は、奇峰である。しかし、實質的に月例運座をもち活動しだすのは、上原三川が参加する翌三十年五月以降である。これを私は第一次松声会と呼んでおきたい。

では次に、いかなるメンバーが加わっているか触れる。手がかりになるのは、「ほととぎす」巻末の地方俳句界記事であるが、松声会の第一報は先述した奇峰の一文である。そこには、次のような名前が近作とともにあがっている。

○花兄、三川、螢城、黙仏、木公、犬巢、栗庵、菜雨、東街、奇峰
(31年11月)

この第一報にしても、結成後二年余たった時点での記事であり、「会友の離散時にあり」と奇峰が記すとおり多少の異動は、結成後あつたであろう。が、三川、奇峰を中心とした小学校教師が主要メンバーであつた点は、松山の松風会が野間叟柳らの松山高等小学校の教師らによつて結成された事情と同様である。

第一報以下、松声会記事の掲載回数を「ほととぎす」であたつてみると、三十二年は四回、三十三年は二回、三十四年は四回、三十五年は一回、三十六年、七年なしとなっている。第一次松声会の俳

犬里	苔露	牧紫	飛影	木石	三日月	九沢	みずど	瑞穂	長宗	寸人
										○
									○	
								○		
		○	○	○						
○	○									
					○	○	○			
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

三川が松声会の中心的存在であったことはあきらかであるが、以下主要な俳人についてみる。

松声会は松本周辺の俳人達が主要なメンバーであるが、それはかならずしも中信地方にかぎらず下伊那の虻川、芋作、釣月や諏訪の栗庵が参加している。信州にはじめて誕生した日本派のグループなので、各地の俳人が自分の郷里に同好の土を集めた後も「連絡を図りて相研磨」⁽⁴⁾するために、たまたま参加したのである。

さて、松声会の主要な顔触れに関しては、三川が三十五年十二月三日から六日にかけて「長野新聞」に「句さ句さ」と題し四回、十二項にわたって書いている文章が参考になる。その二で、「信中新

派の俳句を善くする人」として掲げられる俳人が当時活躍をし、注目されていた者と考えてよいであろう。そこでは、下伊那の釣月、虻川、芋作、上伊那の八千溪、諏訪の木外、東筑摩の奇峰、岐水、南安曇の豊風の名が出てくる。そして、それぞれに簡潔な人物紹介がなされ、最後に三川みずから自分を紹介しているのである。ここに掲げられた俳人は、八千溪、木外を除き、いずれも右の松声会グループに名が出る者なので、まず三川の一文を紹介しておきたい。

○釣月

竜丘村の人、俗名木下斎、嘗て飯田測候所に在りしが明治三十三年十一月廿一日肺を病みて死す。享年僅に廿一。

○虻川

神稲村の人、丈短く色黒し。囲碁を善くし音楽に巧みに又書に長ず。久しく旧派に逍遙して永く服せざりしが、近年漸く其非を悟りて、胃を脱げり。而して其進歩人を驚かすものあり。

○芋作

上郷村の人、姓は北原名は阿智之助、痴山と号す。故北原信綱君の弟なり。氏は名望ある紳士にして学と才とを兼ね、嘗て伊那名勝誌の著あり。

○奇峰

和田村の人。夙に新派を唱へて同志を糾合せり。黙仏、虚空等直接に氏の誘導に由りて俳句に入れるもの多し。近年飛ばず鳴かざるはやがて天を衝き人を驚かすものあらんか。

○岐水

笹賀村の人、其書に巧みに囲碁を善くするは虻川に似て其丈の高きは之に反せり。磊魁不羈流俗と合はず。

○豊風

梓村の人、姓は中沢、名は寿美恵、年齢二十左右朴直の好青年なり。とあり、三川みずからに關しては、

三川姓は、上原名は良三郎、島内村に生れ、後籍を和田村に移す、現に職を島内小学校に奉じ、年三十六。生れて以来年より上の月給を取りしことなき役に立たずなり、而して長き鬚髯を貯ふるなど胡乱な奴なりと記している。

三川が触れていない俳人にあたる。東街は太田水穂で、松声会結成時の一員と推測される。「ほととぎす」地方欄へ句を掲載した最後の年月、三十三年末にはすでに歌会「この花会」を結んでいるので、しばらく水穂は俳句を東街、歌をみずほのやと号を使いわけており、しだいに短歌に専心していくのである。

奇遇こと矢野一二も「この花会」に属している。東街と逆に、奇遇は三十四年以降俳句に力を入れ、後に第二次松声会の主要な俳人となる小学校の教師である。

布山鳴沢、笠原半仙、三村鉄水なども教師であり、半仙、鉄水は奇峰と早くから親交があつた、松声会結成当初からのメンバーかと推測される。鳴沢も九沢とともに、教師で、南安曇郡明盛村に茶の花会を三十四年に結成している。

頼風は上条螳司であり、信州松本の自由民権結社奨匡社を松沢求策と並んで代表する人物。三十二年八月十五日を期して今井村に荘詠会を、高砂、友月舎、梅莊の三人とともに結んでいる。彼も小学校の教師である。

他に白羊は三十六年に南安曇に涼台会を、豊風は竜吹、青邑、蝶花などと三十四年に南安曇の梓村に庚子会を、犬巢は三十七年に北安曇郡陸郷村に明星会を、それぞれつくっている。

これらの俳人は、図1にあきらかなように、かならずしもつねに熱心に参加したというのではない。三川を中心にあえず会のメンバーに異動がありながら、会そのものは存続してきた。大きくみると、三十三年までと三十四年以降とでメンバーの交替がうかがわれる。

東街、螢城、紫軒、釣月、花兄、黙仏らのように前半に活躍した組と逆に、虻川、芋作、奇遇、頼風、白羊、青邑、豊風、竜吹、蝶花らは後に加わる新しい組である。

「一時は会などを立て、盛にやるがそれも忽ち気拔がしてどうも永く続かない。永くも一年か二年で立消えになって仕舞うのが多い。それ故少し趣味が解りかける時にはもう止めて仕舞うのである。誠に惜いことではあるが仕方が無い、最初から余り熱中もせず、さうかと云って打捨てもせず、不恒心掛けて居て永久不変にやりさへすれば儘に成就するのだが、斯様な人の少いのは遺憾なことである。斯くいふ自分も近來中絶の姿であるから、成就などは無論出来ない。」

と、三川が「句さ句さ」の冒頭その一に記すように、俳句のグループなどは利害をはなれたオープンな集団だけに、そのメンバーの交替ははげしい。松声会自体も、三川のことばの通り三十五年後半は活動が不活発になり、月例会も中断したままであった。

第一次松声会でのグループとしての活動は格別にとりあげるべき

ものはないが、三川個人に關しては、新派と旧派との主張の相違をめぐって、三十四年一、二月の「信濃日報」紙上での鳥羽扶搖との論争があげられる。この点については、すでに本論考の(一)で考察済みである。ここでは触れない。

ただ、松声会の中心である三川がどのような新派の俳句観をもっているのか知ること、松声会自体が大きく目指す方向はわかるであらう。

この点に關しては、「句さ句さ」の記事により概略の理解はできる。すなわち、三川は新派の俳句を次のように記している。

「俳句で新派だとか旧派だとか云ふことはつまり上手下手の別である。(略)旧流の俳句が何故世間多数の嗜好に適するのであるが、新派は何故に適せぬのであるか、それはつまり新派の趣味を解するには相應の學問と特に俳句に付いての相應の修業とを要するからである。言い換れば新派は六ヶしいからである。素養が無くては解らないからである。」

「俳句を平民文学などと稱へ出したのは何時誰が言ひ出したか知らないが、それは全く當を得て居らぬのである。所謂旧派の俳句をも若し文学と見做し得べくんばこれはさういふ名稱を与へても宜しいかも知れないが、所謂新派の句は多くは通俗平易のものではなく、寧ろ高尚と云つてよいのである。漢詩や和歌は其道を研究したもので無くては解らないと同様に俳句も矢張其道へは入ったもので無ければ趣味が解らない。」

「旧派は到底文学としての価値は無いものである。それでは優勝劣敗の道理で新派は益盛大となり旧派は遂に滅亡を免れないであらうか。否々俳句の歴史は常に旧派の滅びざるを証するのみでは無く必ずしも新派の盛になるべきをも受合はないのである。」

「新派に入るにはどうしたら善からうかといふ質問は度々受ける所であ

るが別に良法も妙案も無いのである。新派の趣味を会得するには人の説明など聞いても容易に解るものでない。つまり自得するのが一番よいのである。」

日本派の新俳句がどのように世界からみられていたかが三川のとばからよくうかがわれる。俳句は上手でなければいけない。それには學問と修業とが必要であり新派の高尚な趣味を知るには、結局自得する以外にないと三川はいつている。松声会グループの主張とみてよいであらう。

次に一句ずつ紹介をしておく。

番兵の曉髭の水りけり
 歌人の歌にもよまぬ木槿かな
 川狩の筥に泡吹く泥鰌かな
 紙を干す紙すく唄も日永かな
 物思ひ居れば雁鳴く雨夜哉
 菊咲いて生垣低き小家かな
 堀返す貝の小塚や草枯るゝ
 葉柳や椽に髪結ふ思者
 蟪蛄の刈り込められし秣かな
 明近き雪院の蚊にさされけり
 大方の葉は虫ばみし木槿かな
 水鳥やドックに入りし今朝の船
 落したる小銭を探す落葉かな
 落合の蘆の茂みや行々子
 草枯や馬のあとより頬被
 乞食の菰かぶりゆく囊かな

三川 奇峰
 岐水
 蛇川
 東街
 螢城
 鳴沢
 半仙
 芋作
 釣月
 紫軒
 宝山
 岡兩
 奇遇
 頓風
 白羊

醒め易き新酒の酔や雁の声
 山寺に狸とかたる夜寒かな
 鶺鴒なくや弱き日のさす城の壁
 落葉していづれの木ともわかぬかな
 夜仕事の短かよりける鼠かな
 丘は松に交りて花の弥生かな
 頭重き病に永き日なりけり
 水楼の青き簾や旭さす
 村塾の師にまゐらす新酒哉
 簞虫に夕日さしけり初時雨
 蒲団着て物打ち語る夜長哉
 舟の腹に添うて流るゝ根深かな
 寒月や市に物売る赤毛布
 空家の庭に芒の戦ぎかな
 此頃は木槿の花のさかりかな
 新築のこゝ隠居所ぞと青すだれ
 板垣ふ町の普請や夏の草
 酔ひふして蚊にさゝれ居る肘枕
 月出づる眼前白し芦の花
 川狩の獲物も多くあけにけり
 朝月の雲の寒さや雁の声
 掛乞ふて旅商人の帰りけり
 薬喰水を貪る渴きかな

花兄 黙仏 犬巢 鉄水 青邑 豊風 竜吹 蝶花 木公 栗庵 菜雨 文泉 寸人 長宗 瑞甕 みすゞ 九沢 三日月 木石 飛影 牧紫 苔露 犬里

「ほととぎす」での募集俳句投句家各地分附表によると、三十二年九月現在、東京六七人、大阪三七人について信濃が二八人、つぎに武蔵二一人、伊予一八人という順で、信濃は全国で三番目に多い

投句者をほこっていた。同様の統計は翌三十三年十月にもみえるが、東京一一一人、大阪七四人につき、五〇人ほどが投句している。このように、日本派の投句者が多いのは、松声会の結成にしげきを受けて県内各地に小グループがつぎつぎと生誕したことによる。その際、三川によって編まれた『新俳句』は日本派の恰好の手引き書となったのである。

(二) 第二次松声会

1 はじめに

明治三十五年三月発行の「ほととぎす」第五卷六号の地方俳句界報に松声会の記事が載ったきりで、三十五年はなく、翌年には一回も状況報告がないことはすでに触れた通りである。

明治三十年五月以降、東筑摩郡島内尋常小学校校長となり三十四年には島内尋常高等小学校長に任命される三川は、島内村に青年会を興し、論語や唐詩選の講義をみずからひき受け、青年の知的好奇心を高めるために啓蒙活動をはじめるとともに、一方では、農村の害虫駆除と益虫保護のため率先して実務を説いて、実践活動を行なっている点については、本論考の(一)および(三)で考察した。

三川のこのような村内での啓蒙活動や実践活動が旺んになるのは逆に、松声会の動きそのものは不活発となっていた。矢ヶ崎奇峰が三十二年、北安曇郡立中学の創立専務委員となって松本より大町に転任、中学設立不認可のため大町小学校の雇教員となり、後に

訓導から校長になる三十六年までの松本不在も一因であろう。が、とにかく、三十五年九月十九日、正岡子規が逝去したころには、その会としての動きはほとんど休止していた。

この頃、松声会以外の県内日本派俳句グループの動きは盛んである。諏訪地方では、交阿会（竹舟、四迷結成）、鶴社（亮湖、松月、喜月、桂山、栗庵結成）、一声会（梧山、四泉、真風、孤岳、藤庵、花残、藤青、紫石ら）、昼寝会（流水、竹風、汀川結成）のグループが結合し、三十三年には二葉会となり、岩本木外、関紫竹が中心となる。下伊那では、北原芋作、愚然子、風外、孤村、芙蓉らで三十一年二月に結成された飯田松声会が、飯田一声会（美濃中津川の俳人との交流が旺ん）とともにたしかな存在となっている。北信では、三十二年五月、更級郡牧郷村にできた新声会が活発で、宮崎梅塘が熱心である。

三十六年八月二十日、松本の宇川亭に、諏訪、伊那、長野からこれらの俳人が参集し開いた信濃俳人会は、長野県内の新俳句運動を興隆させる機運をもちあげたものとなった。松声会の活動にも、結果的にカンフル注射の役割を果たしたのである。当日の出席者の主要メンバーは次の通り。（写真参照）

三川、奇峰、春畦、狸村、頓風、奇遇、紫金桃、河柳、露香、罔両、秋稿、有一、梅塘、琶村、歌朗、活東、栗村、木外、長宗、兜城、四沢、村雨。



2 松声会再興

満春草堂主人（胡桃沢四沢）の「俳人奇遇の死」によると、松声会を再興しようとする動きにあらわれたのは、信濃俳人会が開かれた一か月後、九月二十三日、秋の彼岸の中日であった。



胡桃沢四沢と田中歌朗の二少年は、松本の郊外、牛伏寺へ吟行と決めこんだ帰途「此日をこれきりで、別れてしまふことが惜しいと云ふ心持」から松本市出居番町の鉄水三村寿八郎を訪ねることになる。鉄水は松本小学校の校長である。

「丁度いゝところへ揃って来た。今夜は奇遇が、諏訪から帰って来て、うちへ泊ることになってゐるといふことであつた。さうして、奇遇を迎へるために、初物の松茸飯を焚いたといふので、先客の二人の帰つた後に、鉄水夫人までが此二少年の訪問を喜ばれた。二人の心はやゝ得意であつた。さうして今の今、途中で相談して来た計画が実現するのだといふ喜びで、胸がわくわくと躍るのを覚えるのであつた。急に思ひついた計画といふのは、松声会の再興であつた。」

「二少年の志は、松声会を起し、新鋭奇遇を中心として、当年の意気を恢復しようといふにあつた。それには三川、奇峰の両先輩の諒解と、今後の指導を乞はねばならず、奇遇の奮起をも促さねばならぬので、この肝煎役は鉄水の外に無いと考へたのであつた。此意気込みで来て見れば、今夜は奇遇が来ることになって居るといふのである。時にとつて、天の利と人の和と併せ得たものであつた。待つこと少時、旅装を解いた奇遇は黙々として来り座に着いた。さうして木外、河柳などを歴訪して来た消息を、ぼつぼつと話して諏訪の文運の侮り難い将来を有することを説いた。此機に乗じて、我が松声会再興談は、熟議の余地は無かつた。それでは此夜の偶会を再

興第一回例会として、来月の第二回期日を定めて、三川、奇峰其他の諸氏に通知しようといふことになつたのである。」

私は再興された松声会を第二次松声会と名づける。右の四沢の一文によつて、松声会再興のしようが明瞭である。ここに登場する胡桃沢四沢や田中歌朗は、第一次松声会にはまだ年少で加わつて居ない。第二次になつて、はじめて参加し、もっとも熱心に活動する俳人となつていくのである。後に明治三十九年三川は、「長野新聞」紙上に「俳壇の双壁」という一文を書き、四沢と矢野奇遇を現時での信州俳壇の双壁と讃えている。第二次松声会が、第一次よりもいっそう若い、子規の響咳に直接触れない熱心な俳人達によつて興されたことは、子規による日本派の俳句運動がようやく地方に根付いたことの証左といえよう。赤羽石雨、赤羽皎々、小林枕山、野村菱堂などはそのような新人である。

ところで、第二次松声会が実のある活動で注目されるのは、三十七年に入つてからである。三川が四月二十七日に島内尋常高等小学校校長職を退き、俳句に専心するようになってからといつてよい。そこでは、二つのことに瞠目する。一つは、信濃十句集（同年六月「雲十句」よりはじまる）の試みであり、他の一つは、結社誌「はつき木」の存在である。ともに、それまでの松声会の運動に一線を画す、だいたいな事業である。

信濃十句集に関しては、次章で触れるので、本章では、「はつき木」を中心にした松声会の俳人達の状況をみたい。

3 「はゝき木」目次一覧

俳誌「はゝき木」は、明治三十七年十月十日に創刊号が出された。三十頁立の冊子であるが、内容は立派なものである。本誌を発売したのは、松声会同人による子規自選句集頼祭書屋俳句帖抄上巻の輪読稿を掲載し、保存するためとの見方があるように、輪講の記録は十号の終刊号まで一回もかかさず出されている。当記録が「はゝき木」の柱である点は認められるところである。

「はゝき木」との誌名に関しては、先述した通り、すでに明治二十八年ころ、発刊の企てがあった誌名と同じであるが、これとは、内容上のかかわりはなく、便宜上採用したものとされる。⁽¹⁾ また「はゝき木」の主義主張の類については、「箒木」は敢てこれを以て豊を固うして執て下らぬといふ主義なのではなく、我信州にありて（乃至は信州以外にしても）同好の士の相集て、句作に俳論に、俳文俳話に共に研鑽し、共に披瀝して、文学の小天地を形造らんとするのが余輩同人の主眼とする処である」との奇峰の巻頭言であきらかなように、格別の方針があったものではない。「はゝき木」は、創刊後一年、十冊を刊行して終刊になる。現在では稀覯本に属するので、次に、一号から十号までの目次の一覧を資料として掲げておきたい。これによって、全体の傾向を推測することができる。

俳誌

はゝき木 目次

第一號〜第一〇號

自明治三十七年十月十日發行
至明治三十八年十月十五日發行

第一號（毎月一回一日發行）（明治三十七年十月十日發行）

鳴雪翁祝句

はゝき木發行について

俳人百池

頼祭書屋俳句帖抄講義

奇峰一頁〜二頁（頁以下省略）
奇遇 二〜五

松聲會 五〜八
同人 三川・奇峰・歌朗・枕山
・四澤・奇遇

頼祭書屋俳句帖抄上巻
廿七年秋の部より二頁

秋季雜吟

八〜九

出句總

枕山・翠濤・規南・洛燕居・董哉・豐風・石人・梶村・忍月
・綠山・一文・秀子・錦山生・華洲・春水・歌朗・奇遇・石

雨・伯洲・四澤・三川・奇峰

朝夕十句集

青々子選 九

三川・木外・芋作・四澤・奇遇・河柳・一露・豐風・季彦

御狹山の一夜

董哉 九〜十一

徵兵検査

歌朗 十一〜十四

寺住居

枕山 十四

不折雜話

靜軒 十五〜十六

草花日記

四澤 十六〜十九

募集句

鳴雪選 二十〜二十一

火花

洛燕居他二十七

花火

宗吉他二十七

三川選 二十一〜廿二

雜錄

三川 廿三〜廿五

色彩十句集

廿五〜廿六

作者十名

露月子選評

松聲會

三十七年九月八日三川庵九月例會

廿六〜廿七

會者、三川・奇峰・四澤・枕山・奇遇・歌朗

謹告

廿七〜廿八

新刊紹介

募集課題

稻例句選

廣告

甲矢

廿八

廿九

編輯兼發行者 長野縣東筑摩郡松本町八五四番地 小松 甲子太郎

印刷者 同縣同郡同町二三五七番地 福田 次郎

印刷所 同縣同郡同町大名丁 合資會社 吟天社

發行所 信濃松本大名町 はらき木發行所

發賣所 同 鶴林堂書店

同 信青年雜誌社商店

同 奇遇 一〜四

同 松聲會 四〜九

第二號(毎月一回十日發行)(明治三十七年十一月十日發行)

兵事の俳句

類祭書屋俳句帖抄講義

類祭書屋俳句帖抄上卷

二十九頁より三十一頁二十七年秋の部終りまで

同人(三川・四澤・歌朗・奇峰・奇遇)

秋季雜吟

九〜一一

出句者 辛作・歌朗・歸麓園・伯洲・洛燕居・泥雛・石人・豐風・枕

山・四澤・一柏・菫哉・白骨・花菱・華峰・錦山・春水・奇

遇・一露・翠濤・梶村・東園・規南・糠水・青柳・釜村・

三日月・忍月・天涯・純一・龍吹・辛葉・三川・奇峰

猫の初陣

歌朗 一一〜一二

十三夜

石雨 一二〜一五

川端まで

菫哉 一五〜一七

地方行事(投稿募集)

四澤 一七〜一八

後の月

募集句

洛燕居選 一八〜二〇

伯洲他三十二

課題募集

二〇

第三號課題 十一月十日メ切

水鳥 露石共選

第四號課題 十二月一日メ切

霧 辛作・木外・奇遇共選

雜錄

左義長 鳴雪選

○ 橋畔雜筆(一)

枯柳 四明選

秀逸俳句一見の事

三川 廿一〜廿二

會報

奇峰 廿二〜廿四

○ 信濃俳句會(越後長岡) 洛燕居報

煙夢生 廿四〜廿六

九品太・溪水生・晁東・二水・春畦・五松・梅塘・通元・瓦研・三

廿六〜廿七

々花・天易兒・稻青・柳家・一轉・丹籬

○兜會(越後長岡) 石川竹三郎報

青岑・旭扇・秋滄・逸山・紅雨・靄山・耕圃・子足・菱汀・鹿語・
鬼城・洛燕居

○松聲會(松本) 十月二日 三川庵

奇遇・四澤・歌朗・奇峰・三川・(皎々)

水鳥・霰・例句選

消息

新刊瞥見記

信濃十句集

第七回課題 十二月十日締切

▲天地人(冬季) 天地人の内一字讀込の事

第八回課題 一月十日締切

▲新年十題 随意に十題を選び各題一句宛

幹事 嶋内村 胡桃澤勘内

第三號(明治三十七年十二月十九日發行)

篇突と獨言

俳人百池につきて

癩祭書屋俳句帖抄講義

癩祭書屋俳句帖抄上卷

三十一頁より三十三頁に渉る二十七年冬の部

前半

秋冬雜吟

出句者 歸麓園・河柳・武人・秋邑・抱虎兒・泥籬・春水・豐風生・

松葉・錦山・月窓・皎々・薑哉・伯洲・青柳・一句生・釜村

・雲外・牧仙・梅塘・綠山・芋葉・四澤・奇遇・三川・奇峰

募集俳句

稻(遲着)

瑞蕩他四十一

水鳥

柳雲外他十

伯洲他二十五

奇遇他六

伯洲他二十三

春水他二十一

雜錄

橋畔雜筆(二)

箒頭餘塵

會報

松聲會(三十七年十一月六日三川庵十一月例會)

會者 三川・奇峰・歌朗・皎々・四澤・奇遇

句は他に椽堂・石雨のもの

良友會

句 水尼・蘇水・亦人・白蓮・山子

消息(奇遇・四澤)

新刊紹介

うめ草

水蒲團例句

露石選 十三

奇峰選 十三~十四

共選 十四~十五

芋作選 十五~十六

奇遇選 十六~十七

三川 十八~十九

奇峰 十九~廿二

水樓 廿二~廿四

一々生

碧月

信濃十句集第五回 人倫(秋)

出句者九人

碧梧桐選評

會報

松聲會(三十七年十一月六日三川庵十一月例會)

會者 三川・奇峰・歌朗・皎々・四澤・奇遇

句は他に椽堂・石雨のもの

良友會

句 水尼・蘇水・亦人・白蓮・山子

消息(奇遇・四澤)

新刊紹介

うめ草

水蒲團例句

四澤 廿八

瑞蕩他四十一

瑞蕩他四十一

瑞蕩他四十一

第四號 (明治三十八年一月二十一日發行)

現時の俳壇

新年二十五題

類祭書屋俳句帖抄講義

明治三十七年十二月四日三川庵 三川・奇遇・奇峰

類祭書屋俳句帖抄上卷 三十三頁より三十五頁迄

二十七年冬の部終

冬雜吟

出句者 泥籬・石人・春水・壺石・忍月・雨石・三日月・豐風・盲目

生・即興生・寒宵・錦山生・山子・蘇水・八十夫・丁泉・白

骨・梓水・皎々・健堂・春鮭・秋色・雨翠・葦哉・桃村・東

園・青邑・岩遊生・曲水生・青柳・梅塘・末廣庵・春秋・奇

遇・三川・奇峰

夷講の福袋

閑談

募集俳句

霰

四澤他十六

枯柳

放天他九

左義長

青柳他二十五人

雜錄

句評の評

思出かき

雜錄

湖畔の一夜

信濃十句集 第四回(時)、第六回(草枯)

奇峰 一〇五

五〇八

松聲會同人 八〇十一

鳴澤 十四〇十五

四澤 十六〇十七

木外選 十七〇十八

四明選 十八〇十九

鳴雪選 十九〇

木外 十九〇廿二

芋作 廿二〇廿三

三川 廿三〇廿四

奇峰 廿五〇廿六

廿六〇廿七

會報

松聲會 三十八年十二月四日三川庵 楯 三十三才

四澤・三川・皎々・枕山・橡堂・奇遇

新刊紹介

次號課題 火事(青々選) 乾鮭(鳴球選)

附録

良寛短歌集

火事・乾鮭例句

第五號 (明治三十八年二月二十七日發行)

類祭書屋俳句帖抄講義

三川・奇峰・歌朗・枕山・奇遇。明治三十八年一月八日。

類祭書屋俳句帖抄上卷三十七頁二十八年の部初めより

四十頁まで四頁

雜吟

出句者 石人・九品太・抱虎兒・青邑・柳雲外・錦山・規南坊・梅里

・師蜂・曲水・皎々・梅塘・盲目生・歸麓園・洛燕居・枕山

・伯洲・岩遊・犀畔・牧仙・秋色・葦哉・寒宵・梓舍・歌朗

・一文字・綠山・青柳・河柳・奇遇

不折雜話(二)

靜軒 九〇十

支那の墓地及送殯

清水生 十〇十二

野邊送り

飯食ふ聞

募集句

水

ふとん

地方行事

館市

歌朗 十七〇十九

露月選 十四〇十五

三川選 十五〇十七

十七〇廿一

節分

正月行事日記抄

玄々 十九〜廿
灰燼 廿〜廿一

信濃十句集 第七回 天地人(冬)

廿一〜廿二

作者七人

第八回 新年十題

廿二

碧梧桐氏の選

廿二〜廿三

募集新題

廿三

一、夜學(冬季) 四澤氏提題

飴市、どてら、汁粉、田うごき

句評の評を見て

岐水 廿三〜廿四
三川 廿四〜廿六

雜錄

會報

二葉會(諏訪) 三十八年一月(河柳報)

廿六〜廿七

蘆庵・木外・山百合・再庵・右衛門・紫水明・汀川・多眠・竹舟郎

・是空・奇山・可堂・河柳

かぶら會(埴科)

廿七

董哉・桃村

松聲會(松本) 三十八年一月八日

廿七〜廿八

三川・歌朗・奇峰・枕山・皎々・奇遇

消息

廿八

櫻・彼岸・燕 例句

廿九〜卅

第六號(明治三十八年三月三十一日發行)

類祭書屋俳句帖抄講義

一〜五

三十八年二月五日 三川庵

三川・四澤・奇峰・皎々・泥籬・華峰・

季彦・歌朗。

上卷自四十一頁至四十三頁二十八春之部終

雜吟

五〜七

出句者 石人・八重櫻・盲目生・伯洲・鳥溪・寒宵・健堂・董哉・黑

僧・波山・皎々・錦山・豐風・吳山・(佚名)・秋邑・曲水生
・奇遇

獨歩

歌朗 七〜八

奇峰君の寓居

遊仙子 九

遺物

四澤 九〜一一

募集俳句

(乾鮭 青々選)

一二〜一三

火事 奇峰選

一三〜一四

不折雜誌(三)

靜軒 一四〜一五

雜錄

三川 一五〜一六

春風春水

一六〜一八

募集句

火事 鳴球選

一八

募集新題 董哉氏提題他

一九〜廿

松聲會 三十八年二月五日 三川庵

廿〜廿一

三川・奇峰・四澤・歌朗・皎々・泥籬・季彦・華峰

はつき木十句集・信濃十句集改稱第九回女(春季) 廿一

消息 廿一〜廿二

新刊 廿二

次號募集俳句課題 第八、九號

廿二

苗代、蛙例句

廿三

第七號(明治三十八年五月十七日發行)

俳人百池(三)

奇遇 一〜四

俳人堀田麥水

歌朗 四〜七

類祭書屋俳句帖抄講義

七〜十一

三十八年三月五日 三川庵 三川・奇峰・歌朗・四澤・枕山・奇遇

類祭書屋俳句帖抄上卷二十八夏の部初めより三頁 十一〜十五

雜吟

石人・泥籬・素泉・月雄・皎々・天の川・伯洲・洛燕居・健堂・寒宵
 ・汀川・葦菜・梅塘・月窓・董哉・東園・波山・牧仙・錦山生・豊風
 ・藤崖・寡蝶・露風・曲水生・緑山・三村・青柳・三石・地馬・八盛
 ・三四・奇遇

大連一瞥

中久喜生 十五

蟹取

歌朗 十五〜十七

募集俳句

十七〜廿一

櫻 露石選

彼岸 芋作選

燕 奇遇選

雜錄

不折雜話四

靜軒 廿一

橋畔雜筆(三)

奇峰 廿一〜廿四

募集新題

廿四〜廿五

夢拙・幾句拙・三川氏提題

はゝ木十句集 第十回 畑打 選者十人

廿五〜廿六

會報

廿六〜廿七

二葉會(諏訪) 河柳報

庚子會(南安曇)

明星會(北安曇)

松聲會(松本) 三十八年三月五日 三川庵

三川・奇峰・四澤・枕山・歌朗・奇遇

新刊

廿七

消息

廿八

次號募集俳句課題(金魚・雷・朝草刈る(九號)

廿八

行々子・夏羽織・瓜(十號)

廿九

金魚・雷例句

廿九

第八號(毎月一回十七日發行)(明治三十八年六月十七日發行)

はゝき木の改良に就いて

奇峰 一〜三

彌祭書屋俳句帖抄講義 三十八年四月二日

三〜八

三川庵 三川・鐵水・歌朗・季彦・四澤・奇遇

上卷四六頁九行より二十八年夏の部終迄

雜吟

八〜十

石人・泥籬・蛙鳴子・月雄・皎々・董哉・岩遊・天の川・健堂・藤

崖・春水・覆・梅塘・孤村・牧仙・鷹軒・歌朗・奇遇

たそがれ

天牛 十〜十一

此頃の記

橋畔生 十一〜十三

募集俳句 牛馬

奇峰選 十三〜十四

蛙

洛燕居選 十四〜十七

苗代

鳴雪選 十七〜十八

雜錄

三川 十八〜廿

一茶の結婚と其生活

露香 廿〜廿五

桑港だより

水南生 廿七

會報

廿六

庚子會(南安曇)

松聲會(松本)

廿七

はゝき木十句集 第十一回幼少(春・夏)

女(春) 畑打句集

碧梧桐子選 廿七

募集新題 九 蕃茄、トマト(夏季) 歌朗氏提題

廿七

十 蜉蝣・かげろふ(夏季) 四澤氏提題 廿八

新刊

廿八

消息 碧玲瓏氏逝く

本號より信青年雜誌社商店主人丸山尙氏が編輯兼發行者になる

行々子・夏羽織・瓜・泳・涼 例句

ハ、キ木第八號附録

良寛長歌集

長野縣東筑摩郡松本町八五番地

編輯兼發行者 丸山 尙

同縣同郡同町番地

印刷者 齋藤 靜美

第九號 (明治三十八年九月十七日發行)

廣告

俳星 甲矢(ハヤ)

(能代) (三川國)

類祭書屋俳句帖抄講義

三十八年五月十七日 帚木發行所

奇峰・皎々・泥離・歌朗・山子・奇遇

上卷、二十八年秋の部前半

雜吟 春夏

一露・八重櫻・雉子郎・魚里・伯洲・菫哉・皎々・木外・菫菜・忍月

・寒宵・綠山・豐風・梶村・草雨・梓水・藤崖・綠水・青邑・至茲・

歌朗・四澤・奇遇

玄蕃亟

山雨日記

募集俳句 金魚 露月選

雷 木外選

朝草刈 三川選

雜錄

一茶の結婚と其生活 其二

會報

魚里居小集(淡路洲本)菅井魚里報

南安庚子會

松聲會(松本)前會報脫漏の句

三十八年五月八日 三川庵 三川・四澤

三十八年六月十八日 帚木發行所 奇峰・歌朗・泥離・山子・皎々

・奇遇

はゞき木十句集 第十二回食物(春夏) 卅一

募集新題(十一) 洪水・大水・出水・水害等 三川提題

他にすぐり、燒酎

嗚呼碧玲瓏君 三川 卅二~卅三

新刊 三川 卅三

はゞき木消息 卅三

例句 芋・踊・木槿

第十號 (明治三十八年十月十五日發行)

廣告 蕪村遺稿講義 月刊浮城(埼玉行田)

甲矢・俳星

類祭書屋俳句帖抄講義 一~六

三十八年七月二日 帚木發行所

四澤・山子・歌朗・奇遇

上卷 五五頁より五八頁迄

雜吟 六~九

素泉・天易兒・魚里・皎々・泥離・菫哉・藤崖・伯洲・寒宵・抱虎

兒・菫菜・綠山・忍月・一歌・孫水・眞砂・伯仙・西友・四澤・奇

峰・奇遇

武田尾行 素泉 九~十

十日間日記 三川 十一

山雨日記 其二 奇峰 十二~十四

十歩の畑 胡生 十四~十五

募集俳句 行々子 青々選 十五~十六

夏羽織 鳴球選 十六

瓜 稻青選 十六~十七

雜錄 三川 十七~十八

橋畔雜筆

奇峰 十九、廿三

會報

松聲會 三十八年七月二日 籌本發行所

廿三

皎々・歌朗・四澤・奇遇

はつき木十句集 第十三回 祭

廿三、廿四

碧梧桐選評

廿四

はつき木消息

丸山尙 廿四

4 「癩祭書屋俳句帖抄講義」について

子規の自選句集『癩祭書屋俳句帖抄上巻』は明治三十五年四月十五日、高浜清（虚子）が編輯兼発行者となつて、東京市麴町区富士見町の俳書堂から刊行された。明治二十五年から二十九年までの句を新年、春、夏、秋、冬の部立に配したもので、その時期の子規の代表句が自選されている。

三川・奇峰をはじめ松声会同人が、東筑摩郡島内村東方の奈良井川畔の三川庵にあつまり、その輪読会をひらく。第一回は三十七年九月八日。出席者は、兩人のほか、歌朗、枕山、四沢、奇遇である。この一回から八回までが三川庵で行われ、九、十、の二回は筈木発行所（松本大名町）でひらいている。三川は三川庵での会にはもちろん八回とも出席しているが、十回を通して、主要な顔触れは、三川の他に奇峰、奇遇、歌朗、四沢であり、他に枕山、皎々、泥籬、華峰、季彦、鉄水、山子が参加している。

第一回は俳句帖、二十七年秋の部のはじめの句、「猫に紙袋をかぶせたる画に 何笑ふ声ぞ夜長の台所」から開始されているが、こ

れは、おそらく、それ以前に二十七年夏までの輪読が行われたものと推測される。

以下、順に輪読上の問題点をとりあげていきたい。

○第一回 三川、奇峰、歌朗、枕山、四沢、奇遇。とりあげた句は、二十七年秋十五句。俳句帖二十七頁から二十九頁「木槿垣人も通はぬ小道かな」まで。

三川の鑑賞や指摘がすぐれていることがよくわかる。たとえば、次のようである。

鶯や昼の朝顔花細し

歌朗曰。朝顔は鉢に植ゑられてある。昼頃であるから萎んで細くなって居る。鶯がその辺へ下りて鳴いて居るのではありませんか。

三川曰。細しは細小の意で朝顔が末になると花が小さくなって昼過ぎ迄も凋まずに居る。それを花細しと言ったので。又鉢やなどではなくて、垣根に咲いて居るのでせう。

歌朗の鑑賞は、句の上に描かれていない特殊な光景を設定しているのに対し、三川は、朝顔の季節の推移にそくした、しぜんな見方をしている。朝顔の咲いている場を垣根としたのも、あたりまえのことでありながらよい指摘である。

○第二回 三十七年十月二日。三川、四沢、歌朗、奇峰、奇遇。二十七年秋の部終りまで。俳句帖二十九頁「根岸音無川 柳散り菜屑流るゝ小川かな」から三十一頁「雨含む上野の森や稲日和」まで。

鳥啼いて赤き木の実をこぼしけり

三川曰。おもてに現れただけの句で、鳥が啼いて赤い木の実をこぼしたと云ふ、単にそれだけの事ですが、どこか感じのよい句だと思ひます。やさしいことをさらりといったにすぎないが、うまい鑑賞である。「どこか感じのよい句だ」と、理屈を述べないところがひかる。

朝顔の引き捨てられし苔かな

三川曰。零れ種のものであらふ。

奇峰曰。着想の面白い句だ。

三川曰。言ひ廻しがおもしろい。

奇峰は着想といふ、三川は言い廻し、すなわち表現を問題にしているが、一句は着想よりも表現の仕方の巧みさが目につく句である。三川の指摘がよりの確だ。

○第三回 三十七年十一月六日。三川、奇峰、四沢、歌朗、皎々、奇遇。二十七年冬の部前半。俳句帖三十一頁「日のあたる石にさはればつめたさよ」から三十三頁「染汁の紫氷る小溝かな」まで。

根岸を出て

日暮や大根かけなる格子窓

歌朗曰。日暮は根岸から続いて居る日暮里といふ地名である。根岸を出て日暮里へ行った処が格子窓の家に大根がかけて干してあったといふ其辺の写生の句でせう。

三川曰。その地方では日暮里と云って居るやうだが、なぜ「日暮や」と云って「ニッポリ」と言はなかつたでせう。

歌朗の解釈の早合点を指摘し、詠まれた通り正確に把握すること

に注意をむけている。歌朗の読み方は散文的で平板である。ことばのやわらかなふくらみやおもしろさを見落している。

○第四回 三十七年十二月四日。三川、奇遇、奇峰。二十七年冬の部終りまで。俳句帖三十三頁「古池の鴛鴦に雪降る夕かな」から三十五頁「霜枯の佐倉見あぐる野道かな」まで。

○第五回 三十八年一月八日。三川、奇峰、歌朗、枕山、奇遇。二十八年新年より春の句前半。俳句帖三十七頁「裏門や小さ輪飾歯朶勝に」から四十頁「橋踏めば魚沈みけり春の水」まで。

裏門や小さ輪飾歯朶勝に

奇遇曰。「小さき輪飾」と言つてはどうですか。

三川曰。それでは「き」の音が強すぎて苦しく聞えるが、「ちいさ」と云つたので、穏やかに聞こえる。

微妙な語感を上手に説いており、三川の指摘はまつとうである。ことばの音感への配慮は、奇峰の次のような句をめぐる色感への指摘とともに、すぐれている。

東京

紫の灯をともしけり春の宵

奇峰曰。東京と云ふ前置があつて、紫の灯と言つてあるから、東京の夜景を客観的に詠じたやうであるが、決してさうでない。「紫」と云ふ文字は或はアークライトの様なものを見て思ひ付かれたのかも知れんが、東京一般に又は東京の何処かで紫の灯をともして居るのではなく、主観的に東京の夜景の美しさを述べたのである。紫は艶やかな色で春の宵も

亦艶やかな時である。この時この色の灯をとますのは、実に此上もなく美しい。夜の東京の美しさは、その美しさであると云ったのである。千百の色でいろどるべき処を只一色をとり出してその千百の色を代表させて置いた処と、東京と云ふ前置が、名古屋とも大坂とも動かせない処は実に旨いものである。

○第六回 三十八年二月五日。三川、四沢、奇峰、皎々、泥籬、華峰、季彦、歌朗。二十八年春の部終りまで。俳句帖四十一頁「春の水出茶屋の前を流れけり」から四十三頁「柳桜柳桜と植多にけり」まで。

○第七回 三十八年三月五日。三川、奇峰、歌朗、四沢、枕山、奇遇。二十八年夏の部初めから。俳句帖四十四頁「短夜や一寸のびる桐の苗」から四十六頁「五月雨大井の橋はなかりけり」まで。

病む人の顔にかけたる蚊帳かな

三川曰。人が蚊帳を吊る時か外す時に寝て居る病人の顔へか帳の裾かなどを引っかけたのでせう。

奇峰曰。「顔にかけたる」はわざわざかけたので、病人が寝て居ると、顔へ蚊や蠅などが来て、煩るさいから、蚊帳を掛けてやったのでせう。

対照的な解である。三川はできるだけ素直な読みをするが、奇峰は、一步踏み出して、特殊な情景を考えている。表現されたことばのしぜんさからして、三川の受けとり方がこの場合は穩当なのではないだろうか。やさしい表現で、おおらかに詠う句を三川は好み、みずからも、そのような句調をもつが、次の句など、典型的な三川

好みといえよう。

○第八回 三十八年四月二日。三川、鉄水、歌朗、季彦、四沢、奇遇。二十八年夏の部終りまで。俳句帖四十六頁「高浜海水浴 蕪風や裸の上に松の影」から五十頁「須磨 入口に麦干す家や古簾」まで。

瓜好きの僧正山を下りけり

三川曰。僧正が山を下って里へ来た。あれあそこへ瓜好きの坊さんが山から下りて来たと云ふのだ。瓜は淡白なもので淡白な人に好かれる。此の句は淡白な調合で句調もあっさりして居る。

○第九回 三十八年五月十七日。奇峰、皎々、泥籬、歌朗、山子、奇遇。二十八年秋の部前半。俳句帖五十一頁「秋来ぬと柱の拂子動きけり」から五十五頁「網あげて鯛ちらばる浜辺かな」まで。

○第十回 三十八年七月二日。四沢、山子、歌朗、奇遇。二十八年秋の部終りまで。俳句帖五十五頁「春日社 灯ともすや露のしたゝる石燈籠」から五十八頁「石手寺 通夜堂の前に粟干す日向かな」まで。

輪読の会場が三川庵からはゞき木発行所に移る。九、十、二回の記録をみると、高名な法隆寺の句に寄せた四沢の鑑賞が光っている。

法隆寺の茶店に憩ひて

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

山子曰。法隆寺の茶店に休んで柿を食って居れば法隆寺の鐘が鳴った。その即興の句である。

奇遇曰。此句は非常に面白いと思ふが、如何云ふ訳で面白いのでせう。四沢曰。法隆寺と云ふ処が歴史的に面白い、柿も此辺の名産で、殊に果物の好きな子規子とその名産の柿を思ふ様食へるので愉快であった上に、名高い法隆寺の鐘をきいた事に一層愉快であったのだ。その愉快であった事実をそのまま表はした処が他人にもその愉快を伝えて面白いでせう。

奇遇曰。その上なつかしい感じもある。

「観祭書屋俳句帖抄講義」も「はゞき木」が十号で終刊となったために、途中で終ってしまう。しかし、子規の句に因して、逸早くこれだけ継続して輪読し、鑑賞を施したものは、他にないであろう。三川を中心とした松声会同人達のものの方や感じ方の鍛錬の上で、この輪読は、大きな意味をもっていた。そのなかで、上原三川の鑑賞の特色は、なによりも、表現されたことばを素直に読みとろうとする点にあった。それは、三川がくりかえしいっているように、表現されたかぎりの映像を的確に把握し、過分な思い入れをしない、子規から学んだおおらかなリアリズムの精神とつながるのである。

八 信濃十句集

(一) 資料翻刻その一

信濃十句集は、明治三十七年六月から三十八年七月まで十四回に

わたって行われた、俳句鍛錬のための試みである。これは、すでに本論考(一)で触れた通り、⁽¹²⁾子規のはじめた月次十句集の試みを取り入れた、いわば信濃版月次十句集といってよい意欲的な方法である。その参加者は、松声会同人にかぎらず、長野県内の日本派の俳人が加わっている点で、日本派俳句運動の地方への伝播の状況を見る上で、だいたいな資料を提供している。

その課題と実施された年月、出詠者数を次に示す。

信濃十句集課題一覧

回数	課題	投句メ切年月日	出詠者数
第一回	雲	明治37年6月10日	10人
二	朝夕	7月10日	10人
三	色彩	8月10日	10人
四	時(秋季結)	9月10日	(10人か)
五	人倫	10月10日	9人
六	草枯	11月10日	12人
七	天地人	12月10日	8人
八	新年	明治38年1月5日	9人
九	女(春季結)	2月10日	9人
十	畑打	3月10日	10人
十一	幼少(春季結)	4月10日	7人
十二	食物	5月20日	8人

十三	祭	6月25日	8人
十四	肢体	7月10日	9人

今日、第四回時十句集を除いて、その資料が残っているのです、まず、その翻刻をし、紹介した上で、考察をしていきたい。ただし、第一回の雲十句集は紙魚の蚕食がはげしく後半の批評部分「断雲録」は判読できないので前半の十句集のみを示した。今回は、一、二、三回のみを翻刻した。

資料翻刻 一

信濃十句集

第一回 雲十句集

規

本集、作者十人句数百句、八句選(天地人付)句集留置、二十四時間以内

次回課題

○七月集 明治三十七年七月十日メ切

朝、夕(夏季結)

朝又ハタノ字読込ニアラズトモ、朝又ハ夕暮ノ景情ヲ明瞭ニ現ハシ

タル俳句ナラ、バ、ヨシ。

○八月集 同年八月十日メ切

色彩(秋季語)

紅、緑、紫、白等色彩ノ字読込ノ秋季、俳句也。固有名词云々ノ制限を設けず

右メ切当日迄ニ到着スル予定ニテ送ラル可シ

六月十三日

○九月集 九月十日メ切

△時(秋季)

年、月、日、昔、古、今、前、後等時読込の俳句也

○雲十句集

④大蛇住んで六月雲のかゝる峰

⑤紅に勝つ紫の雲や夕すどし

⑥夕榮の雲に名残や秋近し

⑦渡御のあと夕雲暑き祭かな

⑧横雲の焼けて早の入り日かな

⑨雲無心出没自在すどしかろ

⑩あけ近き山の灯や五月雲

⑪吹き拂ふ雲や涼しき星の闇

⑫元山や石ぎり崩すひでり雲

⑬日盛や雷雲天の一方に

⑭雨氣づいて降りそな雲の夜振哉

⑮雲の出で蘭思ふ程干ざるなり

⑯羅の雲形戦ぐ衣桁かな

⑰窓開く安居の寺や雲涼し

⑱山僧の雲さし招く扇かな

⑲雨乞や峯作る雲ばかりにて

⑳惟然忌や寝ころんで雲の行くを見る

㉑雲さそふ祭の法螺の響かな

此句何れの点が悪しきや(朗)

以上
四 澤

河 柳 奇 遇 歌 朗 木 外 河 柳 同 峰 奇 遇 同 柳 河 柳 同 作 芋 遇 同 作 芋 遇 同 作 同 遇

⑧^地雲の峰くづれて赤し西の天
 決死隊願書 天覽に入る
 雲の上に名きこえけり子規

平家物語鈿卷

⑨^歌⑩^歌⑪^歌大刀風雲とぞ起れほととぎす

雨雲のかゝる端山やほととぎす

温泉の澤や雲下りかかる時鳥

鳥語雖亦太朗(朗)

⑫^人閑古鳥汝が巢や雲の中ならん

平凡にすぐ(遇)

⑬^歌蜀道や棧雲映雨閑古鳥

鹿の子に涼しき雲に別れけり

緑陰深如水源深(朗)

⑭^歌這ひ出でゝ雲呼ぶ暮の面構へ

月雲に入りけり螢あらはるゝ

⑮^天雲赤き朝夕時や行々子

⑯^歌戦雲 木茂りけり

朝露 の白き雲

一點の雲なき空や凌霄花

山腹の茂りや白雲わく處

⑰^歌雲脚や栗の花咲く麓村

⑱^歌麻畑六月の雲晴れにけり

六月は五月でなければ適切でない(遇)

雨雲の今日も晝過かきつばた

一番分らぬ句だ是亦卷中の一異形(遇)

⑲^歌瀧壺に雲湧き上る若葉かな

「壺」の字如何三川先生に問ふ(遇)

⑳^天暁や麻刈る人の雲をふむ

雲をふむ (遇)

三川 季彦 四澤 河柳 同 芋作 同 奇遇 芋作 季彦 木外 季彦 同 同 同 同 三川 一露 木外 芋作 奇峰

今迄僕は
句が理窟
の句とは
思はなん
だ(朗)

裏山 吹きおろす
雲 閑古鳥
⑳^歌暁の雲横たふや若葉山

平淡(朗)

罌粟ちるや畑の上の早雲

草茂る丘の畑や雲の峯

柿の花町中にちる夏の雲

㉑^人梅雨あかで猶も構も雲低し

「あかで」ト云ヒ「猶も」ト云ヒ「低し」ト言ヒ理窟ゾメニシタ勉ガ悪シ木外
兄如何トナス(遇)

五月雨や菅野に落ちし夜の雲

降り足らぬ五月雨雲や北にとぶ

㉒^人雲低き 或の秋

山の 或の秋

海に の焰かな

雷雲の晴れて一二の臺場哉

毛蟲をば雲突く男怖れけり

これ失敗の作にはあらざるか「をば」は少々苦々し天狗岳の仇をこゝでかへさ
んか阿々(遇生)

㉓^天蝙蝠や雲焼け残る淀の城

㉔^歌江の空や秋近き雲亂れとぶ

乱飛ぶハ秋近き感ナシ(遇) 乱れ飛ぶは秋近きに適切ならん(朗)

㉕^歌雲間洩る日影卯の花下し哉

㉖^歌戦のあとや夏芋のみだれ雲

何ノ事ゾ多少ノゴマカン見ユ(遇)

雷は夕立雲のいきれにこそ

㉗^歌水無月の航海雲の日記哉

○

一人十句 〓られたるあり、即ちはじめの十句をとり

て 〓々に集録す。

同 三川 同 奇遇 一露 同 歌朗 木外 歌朗 四澤 同 木外 同 三川 木外 四澤 同

山深く白雲湧いて夕立哉
 夕立や愛宕の塔に雲低し
 秋近き空となりけり雲の色
 雨雲や蛸うちさわぐ野の小道
 以上

歌 朗
 同 同 同

作・選	芋	木	河	遇	一	歌	峰	季	三	四	計
作	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
木外	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
河柳	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
奇遇	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
一露	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
歌朗	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
奇峰	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
季彦	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
三川	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
四澤	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
選者九人	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
句數百句中八句共選	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
略	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
奇峰(十四點)	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
四澤(十三點)	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
木外、三川、芋作(各九點)	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
△互選結果	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
一三	九	一	五	五	八	七	九	九	九	九	計

四点 夏雲や丹波へ通ふ小荷駄馬
 同 太刀風に雲とぞ起れほととぎす
 三点 雲の出て繭思ふ程干ざるなり
 同 祇園會の鈴となりけり雲の峰

奇 峰
 四 澤
 河 柳
 歌 朗

同 渡御のあと夕雲暑き祭かな
 同 安房の山上總の山や夏の雲
 出句者姓名表

木 外
 奇 峰

第一関	第二関	住 所	姓 名	号
十七日着 十八日木外 氏へ送る	七月十四日着 スグ送る	下伊那郡上郷村 北原阿智之助		芋作
廿日着 同日送る	十六日着 十七日送る	諏訪郡玉川村 岩本 永正		木外
廿四日着 廿五日次へ	二十日着 廿二日次へ	同 郡四賀村 河西 民作		河柳
廿五日夕着 廿六日次へ	七月廿三日 着廿四日夜 次へ	東筑摩郡神林村 矢野 一二		奇遇
スミ	スミ	長野市新地九四 伊藤仙治郎		一露
七月三日受 同五日宮澤 君へ	七月八日受 澤君へ戻 す	東筑摩郡新村 田中 稔		歌朗
七月七日受 スグ幹事へ	七月八日受 澤君へ戻 す	南安曇郡高家村 矢ヶ崎栄次郎		奇峰
七月七日受 スグ幹事へ	八月二日受 スグ幹事へ	東筑摩郡松本町 宮澤 信濃銀行支店内 秀彦		季彦
七月七年六月 了十三日清書 了十四日芋 作氏へ送る	八月十日次へ	同 郡島内村 上原良三郎		三川
同	同	同 郡同村 胡桃澤勘内		四澤

信濃十句集

第二回 朝夕十句集

□次回課題

△第三回(八月集)

○色彩(秋季) 八月十日締切

黒、白、丹、青等色彩に關係ある字讀込なり、固有、名詞、云々の制限を設けず

△第四回(九月集)

○時(秋季) 九月十日締切

世紀、昔、今、昨、明(日)、前、后等、時に関する語讀込なりはしかき

本巻作者十人句数百句、内八句を選び天地人を附して送らるべし。

前回の出句者中奇峰歌朗の二氏を欠き新に豊風、石雨の二氏を加ふ。他に一人の出句者おりたれども入集せず。

卷中或は朝夕の意味なきものあり、或は季不明のものあり。共に課題に違ふ句のなれども集中に加ふこととせり。次回よりは聊々注意あらんことをのぞむ。

本巻の表紙画は友人某君の好意になる。

巻末の余白には俳論、句評等何にても、事、通信に亘らざる限り諸氏の健筆を振はれんことを望む。

七月十四日午後十一時三十分

本巻の清書を了りて

四澤生しるす

朝夕十句集

夕方や藪蚊の家に入り來る

○印は青々選

一 露

○金魚買ふ柚の花宿の朝かな

⑧ 夕月の河沿道や風すゞし

灯點々夏山にくれて島巡り

麥刈りて夕日の長き戸口かな

夕すゞみ夜店の町を通りけり

噴水や夕日の金魚燵きて

夕日うけて暑き旅路や土埃

川涼し投網うつ人たそがれぬ

朝照や晝貞咲いて河原道

⑧ 夕空は拭ふが如く露すゞし

⑨ 朝月に松の落葉や清閑寺

⑩ 禪林の夕べに鳴くや蟬一つ

⑪ 覺め足らぬ顔おぞましや朝納涼

⑫ 黄昏て水うつ人や脛白き

⑬ 朝方の漬物部屋になく蚊哉

⑭ 朝月の蓮影淡し池の水

⑮ 花片に朝の露や百合花畑

⑯ 五月雨の朝肌寒き單衣かな

⑰ 旭さす五反轆や風起る

⑱ 夕風の足元吹いて橋涼し

⑲ 朝とび石に松葉牡丹や朝の雨

○ 盆栽を運ぶや朝の露すゞし

⑳ 朝朝烟竹の皮散る庇かな

㉑ 暑き日の黄昏急ぐ旅地かな

㉒ 行水の肌へ涼しき入日かな

㉓ 雲の峰朝から湧くや日早山

奇 木 豐 石 三 芋 河 四 奇 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 遇 外 風 雨 彦 川 作 柳 澤 遇 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同
 彦 彦

△人倫（秋）親、父母、兄弟、友人、君臣等
 課題は可成広く解せられたし

互選表		互選表		互選表		互選表		互選表		互選表		互選表		互選表		互選表		互選表		
作選	一	石	一	豊	芋	奇	河	季	三	四	計									
雨露	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
石雨	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
豊風	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
芋作	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
奇遇	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
河柳	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
季彦	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
三川	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
四澤	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
木外	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。

◎互選結果

作者十人（句数百句）選者九人八句選

- 五点 瓜茄子豊かに宵の厨哉 奇遇
- 四点 雷はれて白山元と夕日哉 四澤
- 三点 水樓の朝戸開くや蓮の花 同
- 同 衛士のたく火の明方や子規 奇遇
- 同・朝つゆの茄子紫に籠の中 石雨

○僕の句に題を落したのがあったのは恐縮の次第であるが夫れを抜いて呉れた人は少しく注意を欠いた譯かしらん。
 ○高点の句に就て自分の考を少し書いて見やう。

- 一、瓜茄子豊かにの句は今俄に考え出さないが少し前の日本新聞にこんなやうなのが思ったかと思はれて僕は取らなんだ。
- 一、雷はれての句も陳腐の側に見て居た。
- 一、水樓の朝戸に至っては更に陳腐に感じ殊に朝戸が然とらしく聞える。
- 一、衛士の焚く火も何故に新らしいのか分らん。
- 一、朝露の茄子の句、また平凡にしてしかも句法が少し顛倒して居るやに思ふ。
- 高点の五句は僕一つも取らなんだ、何れも第一に陳腐と感じたからであらう。諸君の説を聞きたいものだ。
- 僕の選句は後れて出て居らない、何をぬいたか悉くは覚えて居らんが天位には朝起も安居の心掟哉であつた。
- はゞき木の発行を祝す大に健全なれ。以上 木外
- 僕は八月以来病んでばかり居て八月九月二回分の出句を怠つて大に失敬したが身体も殆んど回復したから十月以降必ず出すことにする何分頼む。
- 高点の五句木外子は人もなげに一々「ヘコナシ」たが僕は其の内三句だけ買つてある。一言せずには居られない。
- 一、瓜茄子の句、日本新聞にあつたからと言はれれば何とも言へないが、兎に角句は髓によい句だと信ずる。
- 二、雷はれての句、木外子は「陳腐の側」として「ゴマカシ」であるが成る程僕も白山が「残雪」「時雨」などに配分してあるのは見た気がするがより以上の趣味を感じたのだから。しかも天に取つた。
- 三、これは、はゞ木外子と同感で「朝戸開くや」が気に入らんから取らなんだ句である。

初 閱	再 閱	住 所	氏 名	号
十五日着 十六日次へ	八月十五日 着十六日次	長野市新地九四	伊藤仙治郎	一 露
十七日朝次 十八日夕次へ	十七日着 十八日夕次	南安曇郡東穂高村下町 及部方 赤羽寿平治		石 雨
十九日受次	廿日着 廿一日送	同 郡梓村下角 中沢寿美恵		豊 風
廿三日着 廿四日送	九月一日送	東筑摩郡神林村 矢野 一二		奇 遇
廿六日着 スグ次へ	九月五日着 次へ	下伊那郡上郷村 北原阿智之助		芋 作
廿九日着 三十日發送	九月十五日 送ル	諏訪郡玉川村 岩本 永正		木 外
		同 郡四賀村 河西 民作		河 柳

四、衛士のたく火の句、「たく火の明方や」の九文字殆んど無意味に感ずる。勿論明方に衛士が焚いて居る火と云ふ事ではあるが。明方になつたら火は消えかかつて居るであらう、明方にどんどん焚きたてると云ふ事もきかないし、実際そんな事のある筈もないと思ふ。然るを。「衛士の焚く火の明方や」とやったのは随に失敗であると思ふて僕はとらなんだ。

五、朝露の茄子の句、茄子に朝露のかゝつたのは実に美しい。木外子は恐らく実際を見ないのか知らん。又句法が顛倒して居ると言はれたが。棒の如く真直に言はなければならんと言ふ筈もない。倒に言ふのも句法の一つであるから単にそれだけの事柄を以てとがめるのは無理である。「ヘナス」なら、より以上の欠点を挙げなければならん筈だ。

出句者姓名表 (以上河柳)

告 票	八月一日 朝受 四澤へ同日	十七日着 四澤へ	松本町信濃銀行支店内 宮沢 季彦	季 彦
十五日朝一 露氏に送る	八月十四日 一露サンへ 送る	東筑摩郡島内村東方 上原良三郎	三 川	
		松本町松本銀行内 胡桃沢勘内	四 澤	

毎月の課題は必ずメ切当日迄に幹事へ到着する予定にて發送せらるべし。
句集は到着後一日以上留め置かざる様注意あるべし。
選句は必ず句集の廻送と同時に送らるべし。
句集選句の遅延及毎月の課題の事等については一々通知を發せざるべし。

信濃十句集

第三回 色彩十句集

はしがき

- 本巻集箋十章、句数百句、内八句を選び天地人を付して送らるべし。
- 巻中夏季の句少からず、課題に違ふものなりと雖も巻中に加へおきたり、季の如何を問はず選句せられたし。
- 前回の出句者にして本巻に出句なきもの、石雨、豊風、芋作、河柳の四氏、暑中旅行等の為なるべしと雖も甚だ遺憾に堪えざるなり。
- 句集の廻送は可成速かならんことを望む。
- 本巻の表紙も亦友人某氏の好意に成る。
- 選句と共に、其短評(選句以前のものと雖も)を寄せられたし。再閱の際一と纏めにして發表せば甚だ面白きことと思ふ如何。

○^天 ① うき人の忘れし紅の扇かな

○^地 ② 色白き少年を持ち角力取

○^人 ③ 閑古鳥白壁落ちし山の寺
(白字赤蛇尾)

○^地 ④ 山裾の岡の白きよそはの花

○^地 ⑤ 瓢一つ葉がくれがちに青き哉

○^地 ⑥ 黄菊白菊天長節の卓の上

○^地 ⑦ 畫かんとして紅なし秋海棠を如何

○^地 ⑧ 草花を寫生す紅の繪具哉

○^地 ⑨ 紅に西洋火燃える立て花火

○^人 ⑩ 朝鳥の來る梢や紅す

○^天 ⑪ 紫陽花の白く化けたる終り哉
(分り萎れたり)

○^天 ⑫ 丸き窓洩るゝ火影や紅芙蓉

○^天 ⑬ 黄を流す野末の川や稻の花

○^天 ⑭ 目上に満天紅の花火かな

○^人 ⑮ 鉢植えの銀杏黄ばみて秋更けたり

○^人 ⑯ 紫の茄子衰へぬ唐辛子

○^地 ⑰ 青空や湖畔の城の二日月

○^地 ⑱ 落鮎の落ちつくし秋の水青し
(分り)

○^人 ⑲ 紫や御拜の幕に施餓鬼旗

○^人 ⑳ 染糸や白芙蓉咲く草の家
(染糸が何？シテアルノカ不得要領ナリ)

○^人 ㉑ 竹婦人水色の帯紅の帯

○^人 ㉒ 隣家の媼鶏頭をくれければ

○^人 ㉓ 鶏頭の赤き心や愛すべし

○^人 ㉔ 老角力顔赤らめて目出たかり

○^人 ㉕ おしろいの花に紅房の燈籠哉

奇峰

木外

蝶哉

季彦

四澤

梅塘

歌朗

一露

奇遇

蝶哉

奇遇

同

同

同

同

奇峰

同

同

同

同

蝶哉

三川

木外

一露

○^地 ㉖ ふじ豆の白紅が咲く背戸の秋

○^地 ㉗ ひた白に木綿熟せし畠かな

○^地 ㉘ 提子から新酒汲む也潤色

○^地 ㉙ 藍色の雲の間を天の川

○^地 ㉚ 豊年の赤く枯れたる煙草哉

○^地 ㉛ 野分たらんとして雁來紅紅し

○^地 ㉜ 長き夜を讀むや黄表紙赤表紙

○^地 ㉝ 秋の畫の赤過ぎにける切籠哉
(看メテ□テ此句ニ逢着ス快哉)

○^地 ㉞ 畫き終へて芙蓉に紅を恨み良

○^地 ㉟ 菊を畫く美人や繪具に恨み多し

○^地 ㊱ 水に映す灯や赤々と秋祭

○^地 ㊲ 草紅葉鼻缺地蔵倒れけり

○^天 ㊳ ませ低く大輪の黄菊咲きにけり

○^天 ㊴ いつ暮れて白き月夜や蕎麥の花

○^天 ㊵ 鶏頭に雁やたれたる白き糞
(糞字無ガモガナ)

○^地 ㊶ 朝貞に紅のいやしき繪具哉

○^地 ㊷ 萩畫いて風毛草の如し花の色

○^地 ㊸ 富士詣百人白き衣かな

○^人 ㊹ 落つる日にそまりて赤き蜻蛉哉

○^人 ㊺ 昔見し女白さよ盆踊

○^人 ㊻ 思ふ人白地の衣のをとり哉

○^人 ㊼ 蚊帳越しに魂棚の灯の白き哉

○^地 ㊽ 貞操のやめ住みけり白芙蓉
(上五拙ナリ)

○^地 ㊾ 堤防の(朝な橋む)赤きいちごや砂畑
やゝ青く片側蒔し店の柿

同

梅塘

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

⑨秋立つや大角豆のさやの赤きより

はちわれて柘榴や赤き夕日哉
尻据えて土手に舟待つ草紅葉

⑩櫻柿畑や柿の名所の柿紅葉

⑪魂棚や灯に高坏の赤々と

星別れ一夜に木槿白きかな

湖白く遠くに見ゆる鳴子哉

星合や何をしのふの青き戀

⑫道ばたに食へぬ茸の紅きかな

葉鶏頭燃ゆるが如く色榮えぬ

寺子等が硯洗ふや水黒し

⑬遠なりの柿いつまでも青き哉

以上

四 澤 三 川 同 木 外 同 同 同 四 澤 三 川 澤

次回課題

草枯(十一月集)十一月十日締切

「名草枯る」「枯むぐら」「枯あし」等十句、期日相違無く御投寄を乞ふ。

◎広 告

俳誌発刊予告

三川 奇峰 主幹

はくき木 定価一冊郵税共金七錢半年分六冊揃金四十錢

一ヶ月分十二冊揃金七十五錢

毎月一回二十日発行

初号は来る十月二十日を期して発行すべし

論評、俳句、文章の投稿を歓迎す

第一号募集句課題 九月十五日メ切

○花火(句数を限らずと雖も可成十句以上たるべし)鳴雪選

秋風秋雨

発行所 信濃松本町大名町

はくき木発行所

▽この先の余白へは例の通り何でも書きつけられたい。(澤)

○芋作君の誘導により信州の俳豪に接することを得て大に満足をす。又

諸君の玉屑が「はくき木」となつて出でんとす、其はくき木の成長を祈

る。三河よりも前記の「甲矢」なるもの出でんとす、日露戦争の今日、

日清戦争の当時よりも俳壇の振はんことを禱る。(蝶 哉)

○今度は三光を撰るに困難した計でなく、八つぬき出すに甚だ如何はしい

句計で面白くなかつた。この前よりよい句が出来なかつたと見える。み

んな大に勉強しなくちやなるまい。

○朝十句集の僕のに朝の字のないのが三つ四つあったのは実にお恥かし

かつた。これからは屹度注意しますよ。朝十句集の二回廻送に接しないが

如何な譯か。

○この句集の二回送を得たら其時こそ大々的に批評して何かの誌上で見

□に入れんと思つて居る。

○信濃俳人大會は是非東京から一人呼びたいといふので、先月末からいろ

く交渉したが鳴碧虚何れも駄目になり、其後鳴翁や茅原華山を介して

紅緑に申込んで見たが、今日まで何等の回答がないといふ始末畢竟時機

も遅くなつて居る今日だから、此際は一時見合はせにした方が宜しから

うと河柳子とも談合して居る。

冬になつたら「つはな会」でも伊藤左千夫を呼びたいなどと言つて居る

から、其時あたり一緒にやつたらいよく面白からうと思ふ。先づ以て

一時延期といふことに承知して貰いたい。

○八月廿八日日曜記了る。二十一日から学校へ参つて居て、昨夜帰宅漸

くこの集を見た譯、廻送延引の段は平に御容赦、けふは朝から日本第一大

軍神の幟を六本と書かされて大閉口、晝寝起して木外斯の通り。(木外)

○木外君が八句を選抜することの困難なることを言はれたが、これは拙者

も同感である。しかし我輩の所見を以てすれば、其困難なる原因は大にこれと異なるので、拙者の困難するのは百句皆如何はしいもの（丈も如何はしいといふ意味の何たるは知らないが）であるといふ点よりは、其各作者の審美観の度合ひを異にして居るといふ点からである。カントが所謂美を以て「知識ト相悖ラザル無欲普遍必須ナル満足ヲ吾人ニ与フル感覺デアール」といへる美といふものの大観からいへば無論美醜の判定は分り切つて居るやうなものゝ、普遍なる快感といふことはこれを抽象していふのは容易であつて具体になるとなかく六ヶしい故、如何といふに其人の詩的修養と境遇経験の千差万別とによつて頗る異同を生ずることを免かれない（と）は例を引く迄もないが、彼の小説脚本を始め詩歌俳句いづれも新作に対する批評の常に紛然として帰一するところのないのみならず、甚だしきに至ては所謂大家先生の批判に於ても表裏相反して居ることは珍らしくない。假りに美といふものを分類して現実美と假想美として見ると、此現実美即ち名山大川月日星辰の如き自然の美に対しては、甚だしき美観上の矛盾は見えないが若し現実美の普遍なるもの外に、萬般の現象に就きて吾人はこれを理想化して假想美を認むるに當ては各人の間に少なからず此普遍的性質を減却せらるゝのである。しかも吾人が所謂詩といふものの上に於て、むしろ此假想美を認めることが尤も多きに於ては、勢此多様な美観の異同を生ぜざるを得ないのである。況んや短詩形と利那の現象とを把握するに於て独特なる俳句に於てをやだ。そこで拙者吾は諸君の名作を拝見するに及んで先第一は諸君が句作當時の位置に立たねばならぬ。然らざれば以て其作の上に同情を寄することの厚薄が出て来やうといふのである。こうでもならうが、あゝでもあらうかと千思萬考の上、倍自己が同様の位置に立ての感じは如何であるかと反てこれを己れに求めねばならぬ、然るにそれも□がだ、そこが修養やら境遇やらがうましく一致せぬ作者は自分の作（つ）た句には尤も同情は深いが讀者はさうは行かぬ、所で或一句につきての判定にさへ迷ふのである。彼の俳諧雜誌などに散見する同一の句につきて選者の幾人もある場合などに随分大家先生といはるゝ方々にして

も一人は天にも地にも選んだものが他の選には全く洩れて居るなど決して珍らしくはない。他の句にしても選句の一致せるものは極めて少ないのである。普通の快感を与へるものこそは尤も名句で即ち不易の句といへるであらうがそれは先づ千載の一遇に過ぎないとすれば此選句の困難といふものが幾何であるかは拙者などの言を俟たないのである。我輩は此色彩百句につきては其悉くが決してしかく拙劣なものではないと思ふ。皆以て鉄中の錚々たる諸君の作でもあり對等の句が多々あるのであると信じて、借選抜となると、中々以ていづれの八句を取るかには一方ならず苦心する。我輩の困難は此点より見たる困難であつて木外君の見たるところとは聊か異なるところがあると思ふので茲に贅言を附記したのである。尚木外君は二回廻送の時に及んで大々的の批評を試みられるとの予告であるから或は其場合に及んで拙者なども聊か詭弁を弄するかも知れない。

◎もう一つ近頃俳句の上に印象明瞭といふことが大に流行するが此印象明瞭といふことと写実といふこととの間の差異を混同し、一面に於ては理想と神韻との差異及び写実と理想との価値を偏視しはしないかといふ疑があるので諸君に訂して見たいとの考えを以て居るが二十四時間の期限内に閑を偷むに苦しむのでこれはあと廻しにすることにす。それと陳腐といふ語が人の俳句を評する尤も、利便な語になつて居るがこれも同様である。

◎あまりくだくしく分らぬことをかいたが、若し理屈が間違て居たらあやまるべし。論語に曰く「奇峰は咎めず」と。
（峰生）

▲本巻の表紙は非常にいゝとは奇峰先生の賛詞じゃ。小生も同感である。某君の勞を多とするのである。

▲選句についてどれらい説を持ち出されるけれども社會が文學的作物を鑑識するの能力がない盲者千人の世じゃもの。

▲詩とは理性の根柢（底）に生じたる美的思想を表現する所の技術である。短形詩を研究するには茲に留意せぬ（也）ばならぬではないか。千歳不易の作は此会により續々出でられん事を切望し一時流行の作に用がないのである。

▲洋紅の原料はサボテンに寄生する昆虫であるさうな。

▲日本画なども従来から用ひ来った絵具に面倒な名がある。同じ紫にも藤とか桔梗とか濃紫とか種々あるので我々の如き門外漢には其称にしまるのは閉口じゃ。

▲無駄口を並べた後に蕪村の句を記してのがれやう。月今宵めくら突當り笑ひけり
(歌朗生)

○近頃俳句を暫くやらんで、脳から詩的美を去って自づと平凡に体なつた様な気がして諸君に対して慚愧やら後れ気やら妙な風になつた。

さて燈(火)か親しむべき期となつたから大に奮勵しやうと思ふ。

○本句集表紙の見事なる感服仕る。

○我郷里の諸君の出句なきは甚だ遺憾と思ふ。(季彦)

●「近頃俳句を暫くやらんで」などは吾々如き木ッ葉俳人のいふべき言でない。自己が俳句を研究して幾年になるであらうか。如何なる作句が是迄にあるだらうかを各自反省せられたい。「」の内の文句の裏面には如何なる意が含まれて居るであらうか。「以前は僕も旨かつたが」位の意味がありさうに邪推される。

(三川)

○朝夕十句集の後について居る句評木外子の一節に「瓜茄子豊かに、の句は今俄に考へ出さないが少し前の日本新聞にこんなのがあつたかと思はれて僕はとらなんだ」とある。而して僕の手許へ送られた選句(遲着)には「瓜茄子豊かに宵の厨哉」と云ふ句が明かに記されてある。どう云うわけであらうか。

○朝夕十句集の選句を其際も一寸云つておいた通り青々子に頼んで此頃其返稿を得た。結果は何れ「ハ、キ木」第一号で御目にかけることとする。

○本集の句も亦、某氏に依頼したから、到着の上は「ハ、キ木」に掲載することの御承諾を願ひたい。

○毎月の出吟と選句とは可成早く送つて頂きたい。(以上四澤)

○各人審美観の度合を異にして居ること、特に假想美の認識に至つて甚しく相違すること。

並に作者の位置境遇に同情を持つべきこと、等に就て奇峰兄の詳論悉く首肯するところ、畢竟選句の標準が違つて居ること違ふべきことは止むを得ない古今の通弊である。僕が此集に対する選句の標準が前回と幾何の相違があつたか、それに勿論自分ながら算定は出来ない話であるが、僕は自から信じて違つて居らんことと思つて居る。殊に信中第一とも誇るべき錚々天狗揃ひの此集に対しては、自分は微力ながら精々切りの慎重なる態度を以て見て居る積である。

如何はしい句ばかりと見たのも前回よりよい句がなかつたと見たのも僕は僕が今だけの審美観より割り出した推定で、これが誤つて居つたら、夫は僕の審美観が大に間違つて居るので止むを得ないのさ。

○千載の一句といふ不易の句といふがどんな句であるか知らないが、僕は平生「不易の句普通の快感を与へる句」といふを目的にばかりしては作句して居らん、僕は近頃のホトトギス調や日本調には非常に後れて居ると思ふから、大に今の流行に追ひ付かうと思つてこれでも一生懸命に飛んで居るところである。此集に対してもこゝに現はれて居る人は失敬かも知れんが矢張り餘程まで當時の流行して居る、俳趣味に向つて研究されて居る。つまり僕杯と同趣味の人々と思つて居る。千載不易一時流行論は古来盛に論説されて居るところであるが畢竟物の両極を示して居る言説で不易即流行、流行即不易であると信じて居る。これに就ては別に細論しないが歌朗兄の「千載不易は此会によりて続々出られん事を切望し一時流行の作に用がない」といふ大胆なる説にはホトトギス驚かざるを得ない。

○句評は今日はイヤになつた、この中の数句に付ては是非自分の考を述べて諸君の説を聞きたい、或はハ、キギの片端を借りるかも知れん。

○豊かに宵の厨哉の句は、僕が失敬した。一度は抜き出して候補者にした

が其後止めにした積りであった。
 ○此集は長野から帰って久しぶりで下諏訪の実家へ帰ったら来て居って、夫れをまた忘れて持って来なんだといふやうな譯で廻送が甚だ延引した。ゆるして呉れ給へ。

以上木外生

色彩十句互選表

作	蝶哉	木外	奇遇	一露	梅塘	奇峰	歌朗	季彦	三川	四澤	合計
選	天	天			人	地	天	天	地	天	点数
蝶哉											5
木外	人										9
奇遇		人									6
一露			人								3
梅塘	人	地									14
奇峰			地								10
歌朗	天										3
季彦	天										7
三川		地									10
四澤			人								13

(付記) 本集は従来のはしとは異り高点者に進呈せず幹事が保管しておく事になって居る。始めての人もあらうから、為念しす。

互選結果

選者作者共に十人句数百句内八句選
 点数は前表の如し。

- 四点 句 落鮎の落ちつくし秋の水青し
- 三点 句 うき人の忘れし紅の扇かな
- 同 年々の垣に赤しや烏瓜
- 同 柿畑や柿の名所の柿紅葉
- 同 山莊の桃の實赤き夕日哉
- 同 神前に白箭供す今朝の秋
- 同 魂棚や灯に高坏の赤々と
- 同 虫なくや大原へもどる黒木賣
- 奇峰
- 同 三川
- 同 季彦
- 同 木外
- 同 四澤

草卒讀過佳句□得□僅カニ、四句失望甚シ願フニ小生ノ眼忙裏ニ臚セル乎、更ニ明朝再読セントス。

概シテ色彩ニ拘泥セラレテノ痕跡ハ覆フベカラザルガ如シ。色彩ヲ表ス紅白杯ノ字ヲ抛ケセバ好句タラント思ハル、モノ多シ非乎 甲夜 九月二十一日午後露月妄 再撰□リテ添刪シテ更ニ六句ヲ得タリ。

二十二日露月妄批

出句者姓名表

初 閱	再 閱	住 所	姓 名	号
十九日着 廿九日着 廿九日着 廿九日着	廿五日次へ 廿五日次へ	美濃国恵那郡中津町 茂木長次郎	蝶 哉	
廿八日送る	十月七日送る	信濃国諏訪郡下諏訪町高木 岩本 永正	木 外	
八月三十一日送 九月一日送	十六日次へ	同 東筑摩郡神林村 矢野 一二	奇 遇	
九月三日着 四日次へ	十八日着 十九日次へ	長野市新地九四 伊藤仙治郎	一 露	

九月六日着 同七日奇峰 先生ニ送ル	十月二十一 日着 同二 十二日奇峰 先生へ向ケ テ出ス	更級郡牧郷村 宮崎国太郎	梅塘
九日スミ	スミ	南安曇郡高家村 矢ヶ崎栄次郎	奇峰
九日奇峰先 生草庵へ持 参さる十日 次へ	スミ	東筑摩郡新村 田中 稔	歌朗
十三日すミ	十月二十九 日スミ	同 松本町信濃銀行支店內 宮澤 季彦	季彦
十四日すミ		同 島内村 上原良三郎	三川
八月十五日 清書を翌十 六日午前蝶 裁氏へ	九月十八日 蝶裁氏へ送 る	同 郡同村 幹事 胡桃澤勘内	四澤

△註▽

七、松声会小史

- 1 「上原三川(一)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅰ―」(信州大学医療技術短期大学部紀要第1号、一九七五)所載、四、旧派との論争、(一)第一次松声会。
- 2 昭和七年二月十五日発行、発行者、矢ヶ崎奇峰先生還暦祝賀会代表者窪田庄次郎。年譜は明治三年より昭和六年まで。
- 3 明治二十七年十二月十五日付で、子規の矢ヶ崎栄次郎(奇峰)宛書簡がある。(子規全集第十八巻書簡一所収)すでに文通があったもようであるが、いまだ奇峰は子規と対面はしていないことが文中よりわかる。逸早く、地方で子規の新俳句運動に共鳴したものととして、奇峰は注目されている人物。
- 4 「ほととぎす」二巻4号(32年1月発行)に鶴社の近況が栗庵によ

りなされている。その文中の語句である。

- 5 上原三川(二)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅱ―(紀要第二号、一九七六、信州大学医療技術短期大学部)五、教育者としての一面、9 島内での日常の項、上原三川(三)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅲ―(紀要第三号、一九七七、信州大学医療技術短期大学部)六、新題昆虫俳句 2 昆虫俳句の意味するもの項。
 - 6 「松本時論」第三十一号、昭和四年九月十五日号による。
 - 7 註6に同じ。
 - 8 註6に同じ。
 - 9 「長野新聞」明治三十九年十月二十一日付。三川が記したのは十月二日である。「予は四澤奇遇二氏を推して、現時我が信州俳壇の双壁となすものなり。」の一節がみえる。
 - 10 胡桃澤勘内編「三川上原良三郎先生略歴稿」(昭和十年一月)によると、「子規自選句集癡祭書屋俳句帖抄論議を始む。これを筆記保存せんと計画せるに端を発して、十月十日俳句雑誌「はき木」を創刊」とある。
 - 11 矢ヶ崎奇峰「はき木発行について」(はき木創刊号)
 - 12 「上原三川(一)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅰ―」(信州大学医療技術短期大学部紀要第1号、一九七五)所載、二、月次十句集における三川。
- 。本集の資料翻刻をするにあたり、胡桃澤友男氏、岩崎睦夫氏にたいへんお世話になった。記して深謝したい。(一九七八年十二月二日 受付)